平成30年度　第２回宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	平成30年度　第２回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成31年３月８日（金）　18時00分～20時00分
場所	宇治市役所　６階　６０２会議室
出席者	（委　員）　蔀会長　伊藤副会長　中村委員　中本委員　井戸本委員 原田委員　瀬野委員　葛山委員 （事務局）　岸本教育長　藤原参事　市橋教育支援センター長 金久一貫教育課長　吉田学校教育課長　福山教育支援課長 渡邉一貫教育課副課長　上口一貫教育課総括指導主事 新田一貫教育課教育指導係長　姫野一貫教育課指導主事 村田一貫教育課学校教育指導主事 （報告者）　チーフコーディネーター及びラーニングコーディネーター ＊　内田委員は欠席
配付資料	○平成30年度第２回宇治市小中一貫教育推進協議会資料 ・平成30年度宇治市小中一貫教育中学校ブロック活動状況 ・平成30年度中学校ブロック年度総括表 ・平成30年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動報告 ・平成30年度宇治市小中一貫教育に係る視察受入状況 ○平成30年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書 ○平成30年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書（概要版）

１　開会
・岸本教育長　開会挨拶
・小中一貫教育チーフコーディネーター、ラーニングコーディネーター紹介

２　報告及び協議事項
（１）報告１　平成30年度宇治市小中一貫教育の取組について
・事務局より資料に沿って報告･説明

（会長）
事務局からの報告・説明に、各委員から質問や意見はないか。
→　各委員からの質問、意見なし。

なければ、私から１件質問をしたい。「宇治学」の取組についての報告の中で、この４月から全学年の副読本が出揃うことを報告いただいたが、（小学校）１・２年生は、取組から外れるのか。

（事務局）
「宇治学」（総合的な学習）は、（小学校）３年生から学習が始まるので、（小学校）１・２年生は、学習の対象外である。

（会長）
引き続き、各中学校ブロックの取組についての報告をお願いします。

・広野中学校ブロック（宇治ひろの学園）より取組報告
・槇島中学校ブロックより取組報告
・黄檗中学校ブロック（宇治黄檗学園）より取組報告

（会長）
３つの中学校ブロックからの取組報告について、各委員から質問や感想等はないか。

（委員）
３つのブロックの報告は、どれも興味深いものであった。まず、広野中学校ブロックの報告について、１点質問をしたい。取組を形骸化していかないように、新たに目的を見つめ直したり、取組をリニューアルしたりする際に、今年度は、子どもたちの主体的な発想を大事にして進めてきたことがよくわかった。そこで、今年度の子どもたちの主体的な姿を次年度以降にどのように引き継いでいこうと考えているか。

（小中一貫教育ラーニングコーディネーター）
今までの課題として、（小中一貫教育の）非常に意義深い取組だから、それを引き継いで行っているという姿があった。例えば、宇治ひろの学園が継続して取り組んでいる「福島ひまわり里親プロジェクト」への参加という取組については、「震災のことを忘れないこと」や「この取組を繋げていくことやさらに拡げていく」という目標も大変素晴らしい。しかし、子どもたちの取組である活動は、「作業だけに終わっている」という印象が強いのも事実である。そこで、今年度の第２回ＨＯＴ-ＭＥＥＴＩＮＧで、このプロジェクトに長年取り組んでおられる方を講師に招いて学習し、その第２部では、「今後、自分たちにできること」について、グループに分かれてワーキングを行った。このような「ワークショップ」は、大変有意義であることが確認できたので、今後は、「何をやったか」という報告ではなく、「やってみてどうだったか」を子どもたち自身で考える取組を重視することで、主体的な姿を引き継いでいけたらと考えている。

（委員）
次に、槇島中学校ブロックの報告について、１点質問をしたい。報告を聞いて、槇島中学校ブロックの取組として、一番の課題と考えていることが、槇島小学校の「分散進学問題」だと感じた。槇島小学校では、現状で、約６割の児童が、同じブロックの「槇島中学校」へ進学するが、残りの約４割の児童が、別ブロックの「北宇治中学校」へ進学することから、「北宇治中学校へ進学する児童」に対して、取り組んでいることや注意していること等を教えてほしい。

（小中一貫教育チーフコーディネーター）
正直言って、（分散進学という課題により、小中一貫教育について）「やろうと思っていること」「できていること」「全くできないなあと思うこと」がそれぞれある。まず、分散進学という課題を抱える中で、小中一貫教育を進めていくことについて、（私が勤務する）槇島小学校が、北宇治中学校ブロックの進める小中一貫教育の取組に乗っかることは困難である。例えば、北宇治中学校ブロックの研修会に参加しようとしても、日程上の問題と教育課程上の問題から、設定が困難である。その中でも取り組めることは、小中一貫教育９年間のゴールイメージの共有化である。そこで、宇治市全体の「小中一貫教育プログラム」を基準として、両中学校ブロックともに、「義務教育９年間の系統的・継続的な指導で、子どもたちに確かな学力や幸せに生きる力を身に付ける」ことを目標にして、取り組んでいる。そのために、北宇治中学校ブロックのチーフコーディネーターとも調整しながら、ある程度同じような取組を行うようにしている。例えば、中学２年生で実施する「職場体験」では、槇島小学校での職場体験に、（日程を調整して）槇島中学校生徒だけでなく、北宇治中学校生徒も、槇島小学校での職場体験を行っている。ただし、「あいさつ運動」を小中合同で実施することについては、槇島中学校とはできても、北宇治中学校とは、（ブロックが異なるため

に）実施することは難しい等、現実にできることとできないことがある。

（委員）
最後に、黄檗中学校ブロックの報告について、１点質問をしたい。報告を聞いて、宇治黄檗学園の進めている小中一貫教育は、何と言っても「施設一体型」ならではの、連絡や連携といった特長を生かしたものであると感じたが、逆に、「施設一体型」になっていることで起こっている問題や課題があれば教えてほしい。

（小中一貫教育ラーニングコーディネーター）
「施設一体型」の小中一貫校であるが故の課題として、「時間割」の編成がある。分離型の場合は、小学校６学年分、中学校３学年分の時間割編成というパズルを組めばよいが、一体型の場合は、それが９学年分になるので、より複雑である。それは、体育館や運動場を含めた特別教室の配当が影響するためである。しかし、複雑で大変ではあるが、連携して工夫すれば、困難なことではないと理解している。例えば、小学校と中学校では、１校時の時間が、４５分間と５０分間というように異なるため、休憩時間にもずれが生じている。小学校の「中間休み」と呼ばれる休憩時間の前半１０分間は、中学校は「第２校時」の授業中と重なっているため、小学生は、運動場に出て５分間待機してから遊び始め、一方で中学生は、授業の終末部分の５分間を（小学生に場所を譲るため）場所を少し移動して行う等、お互いに譲歩するという「連携」によって課題を克服しようとしている。

（２）報告２　平成30年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート結果について（報告）
・「アンケート報告書・概要版」に沿って事務局より説明

（会長）
質問等ないか。

（副会長）
資料Ｐ８に掲載されてる「小中一貫教育のねらい・取組」についての保護者に質問したアンケート結果の『肯定的回答』が、「系統的・継続的学習指導」の項目では、小学生保護者の回答結果を見ると、「分散進学なし」の小学校の方が、「分散進学あり」の小学校よりもやや数値が低いのはなぜなのか。また、全体として、この項目の評価が平成27年度から若干下がっているのはなぜか。この結果を教育委員会は、どのように分析されているのか知りたい。

（事務局）
現段階では、分析できていない。

（会長）
（後半の、肯定的評価が、平成27年度から若干下がっているのは）保護者が、小中一貫教育について周知し切った結果と考えてよいのではないか。このアンケートを実施することの意義やアンケート結果のデータの有効性は十分理解した上で、教職員の「働き方改革」も考慮してこのアンケートを実施することについての苦労する部分の本音の意見を聞きたい。

（委員）
（アンケートを実施して）７年間の成果は出ているので、内容的には、出尽くしていると考える。校内での仕事量（事務量）としては、５・６年生で実施に約３０分、中１（７年生）は、質問内容が多いので、ほぼ１校時分（５０分）かかっている。アンケートを実施することの必然性を考えると、小中学校現場の事務量は、仕方ないと考える。ただし、７年間のアンケート集計結果から、ほぼ答えは出ているので、アンケートの実施や内容について見直したり、（一旦終了して）５年先に

改めてアンケートを実施する等、見直す時期が来ていると考える。

（事務局）
全体で、２２小学校、１０中学校からのアンケート用紙を集計し分析する事務は、苦労する部分も多いが、中期（小５・小６・中１）の指導目標を「滑らかな移行（接続）が図れるようにする」としているので、特に、接続部分の小６・中１の児童生徒及び保護者にアンケートを実施することは、集計したデータをさらに蓄積し、指導に活かすためにも必要であると考える。

（委員）
（学校現場として、アンケートを実施することについて）確かに負担はある。しかし、検証していく上で、アンケートで生の声を聞くということは意義がある。現時点では、小５から中３までの５つの学年で実施して分析しているが、ある程度、（方向性が）出尽くしてきたという印象がある。（項目ごとの）「伸び」についても、明らかに有意性を持って変化したということはほとんどない。「検証」というアンケート本来の意義を見たときには、中期（小５・小６・中１）を重点的に見ていく必要が今後は出てくるのではないかと考える。宇治市では、チーフコーディネーターからラーニングコーディネーターに移行していくので、来年度からは、「学力」を柱にした小中一貫教育を考えていこうとしているので、項目を変更したり実施学年を減らすことで、アンケートの見直しを検討する時期が来るかもしれない。そこで、もしもこの推進協議会の場で新しい方向性が共通理解できたら、宇治市教育委員会事務局として、一歩踏み出せるのではないか。

（会長）
各委員や事務局の方々の意見を聞いて、小中一貫教育アンケートの意義は重視しつつ、方法論として、もう少し的を絞ったり、やり方を変えたりする等の改善の余地があると理解した。

（委員）
私も、保護者としてアンケートに回答したが、設問が多いと感じたので、もしも可能ならば、設問の的を絞ってもよいのではないか。また、アンケートの冒頭に、「先生方がこんなに頑張っている」という具体的状況をＰＲすれば、保護者にも伝わりやすく、「協力しよう」という気持にもなるのではないか。

（３）報告３　平成30年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動について（報告）
・資料14頁に沿って事務局より説明

（会長）
資料に従い、視察されてお気付きになったことや今年度の活動について、ご意見等を伺いたい。

（副会長）
10月に南宇治中ブロックの西大久保小学校を視察した。当日は、同じブロックの平盛小学校から先生が来られて、「中国帰国児童生徒の理解」という内容を理解する６年生の授業を参観した。感想として、授業そのものの展開がよくできていて感心した。そのためか、西大久保小の６年児童が、大変熱心に話を聞き、また、活発に質問をして素晴らしかった。西大久保小の６年生児童にとっては、（南宇治）中学校へ進学すると、本日話を聞いた「中国帰国児童生徒」と合流して学習するということを理解する絶好の機会となっている状況を参観することができ、まさに小中一貫教育の意義を痛感した。

（委員）
私も西大久保小学校を視察したが、内容が南宇治中ブロックならではの取組で、この地域は国際的な視点で物事を見ていく必要があることを改めて感じた。子どもたちが、自分のバックボーンを

自信を持ってやっていて、中学生も小学生も生き生きと体験活動をしていると感じた。今回の視察で一番感動したことは、中国武術を行っている中学生が、「今しかできないことをしている！」と自己肯定感を持って熱心に取り組み、自信を持って小学生に語りかけている姿であった。また、以前は中国武術をしている生徒のほとんどが中国帰国生徒であったが、現在は半数以上が日本の生徒であり、さらに、西大久保小学校出身の生徒もいることなどから、地域ならではの取組をていねいに積み重ねてきた成果であると感じ、これこそ小中一貫教育の本当のあるべき姿であると感心した。

（委員）

10月に西宇治中ブロックの伊勢田小学校での合同研修会を視察した。２年生の道徳と３年生の外国語の授業を参観したが、共に子どもたちが先生の話に集中して、しっかり授業が進められている姿が印象的であった。授業後の外国語授業の研修会では、英語の経験が少ない小学校３年生の英語力に他校の小学校の先生や西宇治中学校の英語の先生が驚いていた。ふり返りカードを活用した授業の有効性についても確認され、日程の調整が難しいという問題はあるが、今回のような小中一貫教育の合同研修会をもう少し増やせたらよいと感じた。また、中学校への移行（接続）に不安を持つ小学校教師への中学校教師からのアドバイスの必要性も感じた。

11月には、槇島中ブロックの槇島中学校での６年生の体験入学の状況を視察した。前半の英語と道徳の授業体験では、中学校の先生方が、とてもわかりやすく授業を進め、小学生たちも集中して授業を受けている様子が印象的であった。後半の部活動体験では、６年生の各自が希望するクラブで中学生と交流していた。槇島中学校の生徒が、熱心に小学生に指導している姿が印象的であった。小学校を卒業していく全ての子どもたちが、よりよい中学校生活を送れるために、小中の教職員が、常に情報を共有し連携していくことが大切であると感じた。

（委員）

10月に西宇治中ブロックの伊勢田小学校を視察した。合同研修会の始まる前に、チーフコーディネーターの先生から話を聞いたが、その中で印象的だったことが、小中一貫教育の推進のために、（コーディネーターとして）良かれと思ったことがあれば、あまり考え過ぎず、まず行動してみることが大切であるということであった。コーディネーターが積極的に動く姿を見せると、これまでは、やや取組に対して消極的な教職員も、徐々に前向きに変化してくるというものであった。また、授業参観後の研修会の中で、外国語（英語）の活動について、最初は、小学校教員が、指導法について中学校教員に教えてもらったり、アドバイスしてもらっていたのが、それだけで終わるのではなく、小学校教員が外国語活動で工夫していること等を交流することで、逆に中学校教員が学ぶ場面も見られ、指導についての深まりを感じることができ、まさに小中一貫教育のよさを感じられる光景を見ることができた。さらに、授業参観と事後研究会だけでなく、その後に、「学力向上に向けた授業改善」等について熱心に議論する場面を参観し、関わる教職員の大変さを感じるとともに、持続可能な小中一貫教育推進の取組のあり方とのバランスを考えて進めていかなければならないと感じた。

（会長）

私も西宇治中ブロックの伊勢田小学校での合同研修会を視察した。その際、チーフコーディネーターの先生からの説明を聞いて、牽引役の先生の役割の重要性を痛感した。また、次年度から、チーフコーディネーターがラーニングコーディネーターに変更されることで、学力充実・向上に主眼が移っていくことになっても、これまでのチーフコーディネーターがキーパーソンになると感じた。しかし、重要な役割を果たそうとオーバーワークにならないよう、無理のないよう推進役を務めていただきたい。

（委員）

11月に黄檗中ブロックの宇治黄檗学園を視察した。中学校の生徒会選挙に小学校高学年児童も参加している状況を参観した。その選挙では、実際に投票箱を使って選挙が行われ、小中学校の一体

感を感じるとともに、小学校高学年児童が、大人への第一歩を踏み出そうとしているという印象を受けた。また、小中一貫校ということで、中学校の先生方も、子どもたちの家庭の状況や学力状況等を十分把握していると感じた。一方で、子どもたちも、安心して９年間を過ごしていると感じた。美しく整った設備の中で、先生方が小中学校のカリキュラムをスムーズに行うために、情報や状況を交流しながら頑張っているのがわかった。

（委員）
11月に西小倉中ブロックの西小倉小学校を視察した。合同研修会という設定であったが、最初に、授業を公開されている全ての学級を短時間ずつ参観した。各クラス、各教科による工夫が見られたが、何よりも印象的だったのが、先生からの問いかけに対して、子どもたちが活発に意見を述べている姿であった。授業参観後は、参加されている先生方全員が集まって、授業の内容について協議されている場面を見学した。単に担当者の報告や説明を聞いているのではなく、小中学校の先生が、小中学校それぞれの目線で意見を出し合っている姿が印象的であった。

（委員）
宇治市の各中学校ブロックで行われている「合同研修会」は、どの中学校ブロックでも実施されており、その実施方法は、（改善を重ねて）ほぼ完成形となっている。今後は、その内容をどのようにしていくかが課題である。今回、西小倉小学校を視察させていただき、授業を参観させていただいて、どの先生方も、自信をもって授業を行っておられるという印象を受けた。その背景には、公開授業を行うことを自発的に希望した上で、中学校の教員も一緒に準備して実施したので、効果的な仕掛けも設定された授業であったらしく、そのために、授業者の小学校の教員は、自信を持って授業を公開していたと聞いて、内容の洗練された研修会であったと感じた。私自身の経験と、（分散進学のない）西小倉中ブロックの取組の視察を通して、分散進学のないブロックの取組の方が、相対的に内容が充実していると感じている。

（会長）
これまでの各委員の意見を聞いて、お気付きになったことやご意見などがあれば伺いたい。

（副会長）
先ほど協議した小中一貫教育アンケートの件であるが、これまで７年間実施してきて、（一定の成果が見られ、内容的に出尽くした印象があるという状況と）相当な数の集計が大変な作業であるという状況を勘案すると、アンケートの実施を隔年や３年毎、５年毎にする等、間隔を空けた実施することについて、本協議会で検討してはどうか。小中一貫教育を推進するために、（学校現場や行政が）アンケートをはじめ大変苦労して取り組んでいる状況を考えると、アンケート実施に係る事務を子どもたちの指導や研究に充てる方が重要ではないかと考える。

（４）報告４　平成31年度小中一貫教育の取組について
・事務局より説明

（会長）
今の説明によると、来年度の一番の変更点は、コーディネーターの位置付けであり、全てがラーニングコーディネーターに変わり、これまで以上に学力に重点を置くということになった。宇治市において小中一貫教育が全面実施されて７年間が経過し、取組もかなり前進した。今、事務局から次年度の方向性も提示された。そこで、各委員から、今後の小中一貫教育に対する期待や注文を一言ずついただきたい。

（委員）
ラーニングコーディネーターの全校配置については、子どもたちに確かな学力をつけるためであ

るから、宇治市全体で、この「子どもたちに確かな学力をつける」という共通のゴールを目指して、チーム宇治として、取組を交流しながら取り組んでいきたい。

（委員）
この度、宇治市校長会と教育委員会が共同で、全ての教科の基礎となる「国語」の力を伸ばすために、来年度からアクションプランを立ち上げることになった。そして、その取組の中心となるのが、ラーニングコーディネーターである。したがって、来年度のラーニングコーディネーターの動きが明確になったと期待している。

（委員）
私の住んでいる西小倉中ブロック地域住民の一番の関心事は、統合問題である。特に、西小倉中ブロックの南小倉小と西小倉小の保護者の関心度は高い。西小倉中ブロックは、狭い地域なので、どこに「一貫校」ができても、さほど小学生の通学に影響はないので、地域の青少年健全育成協議会も含めて、今後の展開に注目している。

（委員）
宇治市では、全ての小中学校がスクラムを組み、教育委員会の力も借りながら、確かな学力を身に付け幸せな生活が送れるように、基本的な力を付けるために、来年度からアクションプランに取り組む。その際に、ラーニングコーディネーターを有効に活用しながら、各中学校ブロックの実情に合わせながら取り組んでいくことになっている。そこで、来年度も、本協議会のような場で、取組についての検証を行ったり、各ブロックの取組に対して、叱咤激励していただきたい。

（委員）
わが子が、小学校を卒業して中学校へ進学しようとしている時期に、このように小中学校の先生方が、小中一貫教育を進めるために、これほど頑張っておられることを知ったので、子どもたちに声かけをする等の家庭として協力できることをしていきたいと思う。

（委員）
小中一貫教育を推進していくにあたって、連合育友会として、行政や各学校とこれまで以上に連携して、保護者や子どもたちをサポートしていきたいと考えているので、何か力になれることがあれば、遠慮なく各ＰＴＡ・育友会に相談してほしい。

（副会長）
全てのチーフコーディネーターをラーニングコーディネーターに移行することで、小中一貫教育をさらに学力充実を重点を置くシステムにシフトしていくことは大事なことだと思う。ただし、学力充実を推進し、子どもたちの学力向上を推進するべきラーニングコーディネーターの果たす役割について、他市町の例を参考に、注意してほしいことがある。それは、「小中一貫校」を設立すると、学力充実を推進できる優秀な教職員を寄せ集めるため、学校全体の学力は間違いなく向上するという結果が出ている。学校全体の学力が向上するという結果が出ているのは、学力充実を推進する教職員の指導や取組により、学校全体の成績（平均点）が上がるからである。来年度から配置される全てのラーニングコーディネーターは、学力の格差が広がるのではなく、全体として底上げが行われるよう、その役割を明確にして取り組んでいただきたい。今年度、委員として小中一貫教育の状況を視察したり、取組の報告を聞いて、先生方が本当に頑張っておられることがわかった。

ところで、各小中学校は、地域に支えられているため、「地域の学校」というアイデンティティーがある。しかし、「各中学校ブロック」のアイデンティティーはどうなっているのかと疑問に感じる。もしも中学校ブロックのアイデンティティーを確立しようとするならば、例えば、ブロックで集まった時に、「ブロックの歌」を歌うなどの工夫がないと、なかなか難しいのではな

いかと感じている。

（会長）

委員の方々それぞれの立場から、貴重な意見をいただき大変ありがたい。本推進協議会の主たる役目は、宇治市の小中一貫教育の進行管理にあるという意味で、大変有意義な１年間であったと自負している。最後に、本推進協議会の次年度以降の方向性について伺いたい。

（事務局）

小中一貫教育についてのこれまでの状況を振り返り、今後大事にすべきところを残しつつ、（例えば、アンケートの実施方法のように）改善すべきところは改善して、進めていくべきであると考える。今後の数十年先を考えると、児童生徒数の変化と、それにともなう分散進学の課題を含めた学校の組み合わせなどは、変化していくと思われる。しかし、小中一貫教育を柱にして教育活動を進めていくことは、どんな組み合わせになっても有効であると考えられるので、その進行管理にあたる本推進協議会は継続していきたいと考えている。

（事務局）

先ほど委員より質問のあったアンケートＰ８の件について、説明したい。先ほどの質問は、「小中一貫教育のねらい・取組」についての保護者に質問したアンケート結果の『肯定的回答』が、「系統的・継続的学習指導」の項目では、小学生保護者の回答結果を見ると、「分散進学なし」の小学校の方が、「分散進学あり」の小学校よりもやや数値が低いのはなぜなのか。また、「全体として、この項目の評価が平成27年度から若干下がっているのはなぜか」というものであった。この結果が表れているのは、宇治市全体として、児童生徒や教職員が、年々交流や連携が盛んになり、小中の垣根が年々低くなって、小中一貫教育を行うことが当たり前になったために、当初と比べると、保護者や地域に対する広報活動が弱まっている結果ではないかと分析している。今後も、保護者や地域に対しても、機会あるごとに広報活動を進めていく必要があると考えている。

（会長）

以上で、第２回推進協議会を終了する。

３　閉会

市橋教育支援センター長より閉会の挨拶